

全国曹洞宗青年会

SOUSEI

No.156
SOUSEI
2012.02

人の心を動かすものは

いつの時代も理屈じやない。

特集・総合企画委員会の挑戦



特集・現地レポート①

福島 の地は今

現地の心に向き合う僧侶達

暮

れも押し迫った2011年12月某日、高速をひた走る車中から、まだほの

暗い東北の山々を眺めていた。震災直後の訪問から半年。再び福島へと向かっている。今回の訪問の目的は、全曹青有志による除染ボランティア活動への同行。作業に尽力する僧達の代わりに、福島の今を記録するのが私の仕事だ。しかし、除染という未知の作業の前に、どうしても気がかりが拭えない。今回の活動には、全国から20余名の青年僧が集うという。彼らの胸中には、私のような乱れはないのだろうか、そんなことばかりが気になった。

除染作業の現場となるのは、伊達市の下小国・山下行政区公民館である。レインコートに長靴、マスクを身に付けた僧達を前に、現地の区長の高野隆さん(76)が話し始める。「地区で集まりをというと、我々にはこの公民館しか無いのです。しかし、行政からは除染の対象外と言われて困っておりました。



自分達で作業しようにも、櫛の菌が抜けるように避難する者が後を絶たず、人手も足りない状況です。今回、お寺の方々に力を貸していただけることとなり、地区全体で喜んでおります。本当にありがたく思います」その言葉を聞いて、除染という未知の活動に緊張を漂わせていた参加者に、「よし、やろう!」という気迫が満ちるのが傍目にも分かった。作業の安全を期して、市からの専門家も同行している。彼らの計測による線量状況は、平均して毎時2〜4マイクロシーベルト。放射線が濃縮する雨樋下は特に高く、線量計の針は毎時22マイクロシーベルトを指した。既に放射線に慣れてしまった地元の人々も、顔をしかめる高い数値だ。私などは思わず雨樋から後ずさったが、そうして立った場所が安全かどうか判らない。芝生の黄色い花、黒々と濡れた肥沃そうな土が信用できない。周囲は長閑な風景が広がるばかりの霊山町の里山だが、今や地区の8割が国の指定する避難勧奨地点。目に見えない怖さが、靴の底から這い上がってくる。

除染活動と言うと専門的な響きがあるが、実際に行う作業は建物周りの土砂の撤去に他ならない。敷地の表土を一面浅く削り取り、土嚢に詰めて除去していく。建物自体も屋根から壁まで、水で丹念に洗い流さねばならない。時間と人手を要する作業だ。しかもこの日は12月というのに陽の光が温かく、働くうちに額に汗が滲んでくる。レインコートやマスクが蒸れるが脱ぐ訳にもいかない。震災から半年以上が経過しても、政府の安全宣言に反して、危険は低まるどころか高まる一方のように思われた。



公民館横の表土を剥ぐ除染活動の様子。限定された敷地面積にも関わらず、時間と細心の注意を必要とする作業。線量計と敷地各所の数値が書き込まれた表。日常風景に無機質な数値が潜む。山下地区を代表して、除染作業への謝辞を述べる高野区長。
 屋根の上や雨樋の隅々まで、高圧ホースで洗浄を行う参加者。
 (写真右上から順に)



作業の噂を聞き付けて、地域の人々が一人また一人と訪れて、ミカンやコーヒーの差し入れを届けてくださった。見捨てられていないとの思いからだろうか、その表情は一様に明るい。公民館館長である渡辺繁さん(69)も、「こうして私達の霊山町に、全国から集まっていたいただいて本当にありがたいことです。原発事故前は、果物がたくさん採れる良い土地だったので…」

その言葉に見回せば、鈴なりになった柿の実が放置されていた。見るからに美味しそうだが、もう食べる者は誰もいない。また、我々の防備と対照的に、住人の服装はいたって軽装そのもの。気になって線量計の有無を聞くと、「持っているとノイローゼになってしまいうから」との返事。見えない放射線に囲まれた暮らしの困難さが、恐怖を麻痺させるしか術がない現状から伝わってきた。

朝から始まった除染活動は、夕方前には敷地の土地一面を剥がして終わった。線量計の数値はゼロにこそならなかったが、軒並み低い値を示し、放射線が幾らかは除去されたことが確認出来た。しかし、未だ福島原発からは放射性物質が漏洩し続けており、風や雨によって再びそれが運ばれば、今日の努力も水泡に帰する。皆が皆、その事は痛いほど分かっていたが、だからといって何もしないではおられないのが人なのだ。

地区の人々から幾度も感謝を述べられ、支援現地本部へと帰る車に揺られる僧侶達。しかし、その表情に単純な達成感はなかった。誰もが今日のこと、そしてこれからの福島のことを、心の中で反芻しているように思われた。悩みを抱えながらも行動し、そしてまた考え始めた僧侶達。私はそれを見た。

「想いを形にする事業を 心をつなぐ、総合企画委員会の挑戦



「花まつり」や「写経用紙」といった、従来の事業に新たな意義を加味し、東北の被災地では、「アクリルたわし」や「文通プロジェクト」など、様々な事業と活動の実践に取り組んでいる総合企画委員会。かつての総務的役割の枠を越えて広がる、その思いとこれまでの歩みを、同委員会の安達瑞樹委員長(37)に聞いた。

新たな一歩から始まった 総合企画の取り組み

「総合企画委員会は、従来総務的な会務を担ってきました。現会長である松岡さんの委員長時代から、次第に独自企画を打ち出す取り組みを開始し、今に至っています」

総合企画とはなんぞやというこちらの問いに、安達委員長はそう話し始めた。兵庫県第二宗務所青年会から招聘されて3年目。前日の除染活動でのマスク姿から居住まい

を正して、改めて災害復興支援現地本部の机越しに向かい合うと、青年僧らしい活気と落ち着きを備えた柔和な方だ。同世代ということもあり、何を感じて遠い被災地へ活動に赴いているのかということにも、個人的な興味に向かった。

同委員会の独自企画である「新たな一歩」は、先達から受け継いだ「花まつり」事業の刷新から始まっていた。

「以前の花まつり事業は正に手づくりによるもので、袋詰めから発送までの全てを委員が手作業で行っていました。そこに、人と人の繋がりと想いを形に」という前委員長の思いが加わって、まずこれの刷新に取り

組んだのです。具体的には形態の一新と、願い事を寄せていただけの絵葉書の同封です。全国から集まった願いを両大本山へお納めする取り組みも始めました。回を重ねる毎に「ご好評をいただき、昨年は2万5千個を発送することが出来ました。集まった絵葉書を拝見すると、そこに書かれた願いに心が和みます。心の交流という、当初からの目的が形になった事業ですし、表の絵を私の連れ合いが描いていることもあって、個人的に思い入れのある取り組みです」

この他にも従来の写経用紙への「写経のころえ」の同封や用紙の変更、写経し易さを高める白い下敷き、向上心に込める形

で考案した上級者向けの「観世音菩薩普門品偈」用紙などなど、受け継いだ事業の品質を更に深める取り組みに、同委員会の並々ならぬ熱意が透けて見えた。

被災地への想いを形に 現場実践としての企画

「これまでの事業の刷新に加え、現在の大きな課題となっているのが、昨年発生した東日本大震災に対する取り組みです。行茶活動から発展した仮設住宅でのワーク



落語には誰もを笑顔にして
人の垣根を無くす力があります



災害復興支援現地本部（伊達市）で取材に応える安達総合企画委員長。

昨年末に行われた除線ボランティア活動に参加して汗を流す安達さん。

大学時代から続けている落語活動は、年に50カ所を訪問している。

被災者の手によって作られたアクリルたわしの収益は、仮設住宅へと届けられる。

仮設住宅を訪ねて行っている、ワークショップ活動の様子。

（写真右上から左回りに）

ショップには、私も学生時代から続けている落語を通しての交流に力を入れていきます。また昨年7月からは、全国と被災者の心をつなぐ、虹のかけはし文通プロジェクトも始めました。各地から寄せて貰った手紙を仮設住宅に掲示して、文通を通して誰かとつながっているということを、確かめ合うお手伝いしようという試みです」

福島県に関しては、仮設住宅への入居は無料ではなく、被災者側に共益金の負担が必要なのはあまり知られていない。安達さんから総合企画委員が、昨年10月から開始した「アクリルたわし作りワークショップ」は、仮設住宅で手づくりされた製品の販売を支援することで、せめて共益金を賄うことが出来ればとの思いで企画したもの。仮設住宅に集った見知らぬ者同士を、柔らかなにつなげる効果も表れている。

「震災から半年以上が経過し、被災者も与えられるだけの状況が負担になっています。自分たちでも何かをしたいという、前向きな気持ちを支えたいのです。今回の除染作業も、参加する前は僧として他に出来ることがあるのではと悩みもありましたが、実際に汗を流して、現場で困っておられる方の顔を見ると、考えの変わった点も少なからずありました。僧だからこそ必要とされているのだという事実を、自分に問う毎日です。今後も個人的には落語で人を笑顔にする活動を、委員会としては想いを形にする事業に注力して参ります。当委員会の顔ぶれは実に多彩で（18頁参照）、そこから生まれるアイデアの源泉は、まだまだ尽きそうにありませんから」

特集取材／西屋真司・ライター

東日本大震災被災地寺院レポート③

仏さまがいた 心の避難所

宮城県石巻市／曹洞宗 法山寺

あの日、大きな揺れの後、法山寺副住職・北村暁秀師は小学校に行っていた子供たちの安否を確認した後、お寺へと徒歩で戻った。そのすぐ後、小学校は約3メートルの津波に襲われ、さらにその津波は山手にある法山寺方面へと押し寄せた。そして、津波に追われるように、付近の住民がお寺へと次々と逃げ込んで来る。幸いお寺や幼稚園の建物には被害が少なかったため、幼稚園が急遽避難所に。避難者の人数は最も多い時で530人。北村師自身が「あまりに沢山の事が同時に起こった」と回想される程、大混乱の日々が始まった。

ブルブルと震えながら逃げ込んでくる人たちの身体を温めたのは、7つのダルマストープ。それでは足りず、幼稚園のスノコを燃やして暖をとった。水は常備タンクや湧水、井戸水などでかろうじて確保。食事は、当日の晩からおにぎりの炊き出しを数日間続けたが、食糧がみるみる減っていく。指定避難所ではなかったために、支援の手が届くまで時間がかかり、やっとバナナなどが自衛隊の手で届けられたのは5日目。しかもその量は十分でなく、自衛隊の災害対策本部へ直接出向いて直談判し、受け取って来なければならなかった。トイレは幼稚園のトイレを使用するも、3日間で満杯に。衛生会社に汲み取りを依頼に行ったが、指定避難所リストに入っていないため断られ、止む無く園庭に穴を掘り仮設トイレにした。避難所では、3日目頃に自治会を立ち上げる。全体班長2名は、全体統括であった住職が人選し、各活動班を編成し、自主的に運営を始めた。お寺の周辺は、しばらくは瓦礫や残った海水で通行もままならない状況。そ

の様子を、まるでスペクタクル映画の冒頭のシーンを見ているような、信じられない気持ちで北村師は茫然と眺めたという。そんな中、師は外部折衝や事務を担当する傍ら、行方不明となった園バス1台を徒歩で探し回りもした。(4日後に見つかり、乗っていた全員の無事が確認された)

そして、震災直後の混乱の中、避難所の中で事件が起こる。保管していた食糧の一部が、何者かに盗まれたのだ。それをきっかけに、自治会の規律が厳しくなり、また、収容可能人員を遥かに超えた人数が避難してきたため、ある時期を境に新たな避難希望者を受け入れなくなった。そんな中、ある出来事をきっかけに、震災当初の大混乱で行うことができなくなった、「慰霊」「供養」を定期的に行うようになる。震災10日目、あるお婆さんが、支給されたバナナを自分で食べずに、園庭に祀られていたお地藏さんにお供えしていたという出来事だ。その様子を見ていた師は、「ここにいた人たちは、ずっと供養・慰霊を求めてきたのではないかとハッとしたという。以後、定期的に慰霊法要を行うようになったところ、「仏さまが見ている聖域」であることを再認識した人が増えたためか、喧嘩や窃盗といったトラブルが減っていった。その後、在宅避難する人が増えて避難所の人数は徐々に減っていき、5月末で避難所はその役目を終えた。その間、奥様は、炊き出しを手伝ったり、子供たちや身を寄せてきた親戚のお世話をしてくれていたが、ともすれば避難所よりも支援の手が薄くなりがちだった在宅避難者の生の声を聴き、それを伝えてくれるなど、懸命に支えてくださったという。



遺族会の設立や音楽祭で 互いの悲しみを分かち合って参りたい。

曹洞宗 法山寺副住職 北村暁秀師



避難所となった園内の様子



避難所での慰霊法要の様子



ともしび音楽祭では鎮魂の火が灯された

また、お寺は、様々な支援活動の拠点ともなった。師の同安居や布教師養成所の仲間、縁のある寺院などから、食糧・生活物資・ハンドマッサージといった各種サービスなどの支援がなされた。今後の支援については「あればやはり有難いです。時間が経っても思ってくれている人がいるということがわかります。また、できれば今後は精神面の支援をいただければと思うし、私自身もそういった支援を周囲の人たちに行っていきたい」と師は語る。

避難所での役割と並行して、師が取り組んだのが、石巻仏教会としての土葬時の読経。読経して送り出した数は993名にも及んだ。その他、宮城県曹洞宗青年会として、物資の配給被災寺院の泥かき、炊き出しといった活動にも取り組まれた。現在は震災の月命日に、寺院持ち回りで追悼法要、法話、炊き出し行茶活動の会を開催しているという。それらの活動の他に役に立ったのが、携帯メールの一括送信。「平時から青年会単位で連絡網を作っておく。これを強くお勧めします」。その他、「連絡通信手段の確保」「地元医療関係者との申し合わせ」「インフラの確保」「ボランティアコーディネート術や外国語の習得」といった平時よりの準備や心がけの必要性を、山形県曹洞宗青年会主催の教化研修事業等で訴えている。山形での発表は、山形県曹洞宗青年会の研修委員が師の總持寺安居時代の1年先輩であったことが縁で実現した。どの場においても、聴衆は真剣な眼差しで、また、「我が事」として聴いてくれていたのではとの印象を、師は語ってくれた。

取材の最後に、「今後の課題は？」と話を向けたところ、師の顔が一層険しさを増した。「震災で大切な人を失った人たちが集えるような機会として『遺族の会』を作りたいと思います。お互いが悲しみを分かち合え、最終的には癒しにつながっていけば」と語る。また、幼稚園の保護者やお檀家さん、さらには、地域の人たちが寄ることのできる機会を設けていきたいとも。昨年の秋、伊豆曹洞宗青年会の方々との共催で「ともしび音楽祭」を開催した。願いや御戒名が記されたカップローンソクのともしびが揺れる中、音楽や屋台の料理を楽しんだり、亡き人をご供養する慰霊法要を行ったこの行事を、これからも出来る限り続けていきたいと語ってくれた。

取材／広報委員会副委員長 長岡俊成

※この取材をはじめ、当連載の「第一回・龍昌寺さま」「第二回・龍泉寺さま」の全文版を、「sousei on web」に掲載しております。併せてお読みください。パスワード「1902」

平成24年 年頭挨拶 全国曹洞宗青年会会長 松岡広也

昨年の未曾有の大災害に対し、衷心よりお見舞いを申し上げますとともに、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

平成24年新春を迎え、東北の復興と皆々様のご多幸ご健勝を心より祈念いたします。

東日本大震災発災以降、全曹青では災害復興支援部を設置し、復興支援活動を行って参りました。5月に発足した第19期は、「今が明日への新たな一歩」をスローガンに掲げ、宗務庁や全曹青加盟曹青会はもちろん、非加盟青年会や宗派・地域・老壮青の垣根を越えた多くの皆様と連携し、これまでに、全国48団体から延べ1800人余りの方々に、全曹青災害復興支援部を通して被災地で活動を行っていただきました。活動内容といたしましては、物資支援、一般ボランティア、寺院復旧活動、読経供養、行茶活動、原発事故による避難者へのサマーキャンプ開催、除染ボランティアなどがございます。物心両面からご支援ご協力を賜りました全国の皆様に改めて厚く御礼申し上げます。

しかしながら、今なお多数の被災者が苦難を強いられ、不自由な生活を余儀なくされているのが現状でございます。「今、被災地の皆さまの現況とお心に向きあい、わがごとく受けとめ、被災地救援、復興支援の活動を強めることが大切」という管長猥下のお見舞いのお言葉にございました通り、先の見えない中、日々変化する状況に対応し、多岐にわたる支援活動を今後も継続していく為には、一人ひとりが現実を受け止め、立場を乗り越えて手を携えながら協力していくことが不可欠でございます。第19期全曹青といたしましては、「青年」僧の視点を大事にしながらも、「青年」という立場に甘えることなく、一曹洞宗宗侶として、被災地と視線を同じくしながら共に「新たな一歩」を歩んで参る所存です。

全国のご寺院様におかれましては、全曹青に対しまして、本年も変わらずご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。本年改歳のご挨拶とさせていただきます。

合掌



お経や法要を 動画で紹介

法式委員会

去る平成23年12月9日、大本山永平寺名古屋別院に於いて法式委員会（石黒英龍委員長）による法要動画撮影が行われました。これは一般の方々に曹洞宗のお経や法要に親しんでもらおうと企画したもので、近日ホームページ『般若』等で公開される予定です。

「動画に合わせてお経を唱えられるよう、色々と工夫しております」との石黒委員長の言葉通り、読経の早さや行道にも細かく指示を出しながらの撮影になりました。普段見られない角度から法要の雰囲気や表情をご覧頂ける『全曹青法要動画』をお楽しみ下さい。最後になりましたが名古屋別院様、桑山良規講師、撮影のご協力誠に有り難うございました。

村山博雅理事長 就任祝賀会開催

全日本仏教青年会

平成23年11月30日、ホテル日航大阪において村山博雅理事長の就任披露の祝賀会が盛大に開催されました。この会は全日本仏教青年会加盟団体代表がそれぞれ発起人となり村山理事長の2年間任期を祝つもので、発起人の一人である松岡全曹青会長も村山理事長にお祝いの言葉を述べました。

この日会場には就任を祝う仏教関係者並びに支援者が多数出席される中、村山理事長は挨拶で「各加盟団体や支援者の皆様、お支え下さる多くの皆様方あつての全日本仏教青年会です。今後もそのことを胸に、仏教青年会活動に邁進する所存です」と決意のほどを述べられました。



第36回 曹洞宗青年会東北地方集會青森大会

東日本大震災犠牲者追悼法要

災害時における役割をテーマに開催

本 年度の東北地方集會は、今般の東日本大震災の発生を受け、「追悼」と「復興支援」をテーマに開催。まず、各プロگرامに先立ち、常光寺本堂において、被災県をはじめとする東北地方各曹青年会連り、稲田泰久師（東北地区曹洞宗青年会連絡協議会会長）を導師に、「仏祖諷經」「東日本大震災犠牲者追悼施食会」が厳修され、式典終了後、会場をそのままに、震災フォーラムが開催されました。

冒頭、久間泰弘師（全国曹洞宗青年会顧問）



が、『東日本大震災における全国曹洞宗青年会のボランティア活動について』と題して、東日本大震災発生からの全曹青の対応を「情報収集」「緊急支援」「被災者への継続支援」の3つの局面に整理して総括。引き続き、宮下俊哉師（全国曹洞宗青年会災害アドバイザー）が、岩手県釜石市を中心とした活動の報告を、記録写真を交えながら行いました。その後、白澤師をコーディネーターに、東北地方各曹会会長諸師、稲田師を交え、各会の「震災発生からの対応を報告いただくフォーラムに移りました。

登壇者からは、『般若』において迅速かつ集約的に支援情報が発信されたものの、青年会員の中における『般若』の認知度向上が必要であるという問題提起がなされ、また、今回の震災における経験をもとにした「対策マニュアルを作成し、周知する必要性」も提起されました。久間師からは「情報収集・共有」が緊急災害時の対応の第一命題であること、また、今回の被災を他人事とせず、「ボランティア活動は全曹青年会員の特定の人たちがする行為」と思わずに、全国の曹青年会がボランティア活動に対する同様の意識を持つて欲しいとの意見をいただきました。最後に白澤師より「何より、無関心が最もいけない」との総括がなされ、フォーラムは無事終了しました。

第34回 中国曹洞宗青年会石見大会

志賀勝氏を講師に迎え開催

月曆と祭祀く古の心を求めてく

去 る11月10日（木）、中国地区の青年会員約60名が島根県大田市温泉津町に集い、第34回中国曹洞宗青年会石見大会が開催されました。月曆（旧曆）のカレンダーを1997年から毎年発行されている志賀勝先生を講師にお招きし、月曆の意味や行事について講演を頂きました。

月が自然界に、また私たちの生活のリズム（文化・行事）に与える影響力は大きいとのこと。祭祀や年中行事は古来、月の動きを主とし、太陽のリズムをも含んだ月曆（太陽太陽曆Ⅱ旧曆）によって行われていたものであり、様々な行事の意義といつもの月曆と密接に関係している。例えば、盆踊り。空には十五夜のまるい月が浮かび、その下では人々が輪になって踊っている。また、月曆で行われていた行事等を、太陽曆の中に置き換えることによって、その行為の真実味が薄くなっているとも。例えば五節句。1月7日の七草、太陽曆では自然界で七草を全て揃えるのは難しい。7月7日の七夕、太陽曆では5回に1回しか晴れないが太陽曆では5回に4回は見られるとの結果があるとのこと。

月曆を知ることによって、地域の祭祀や年中行事・地域コミュニティにさらに関心をもつことができるのではないかと、講演をまとめていただきました。



志賀勝（しがまさる）
1949年、東京生まれ。日本読書新聞編集長を経て著作業。1997年から「月と太陽の曆制作室」を開いて、月曆【月と季節の曆】を毎年発行、「月」と「季節」の復権と発見に努めている。
HP <http://tsukigoyomi.jp/>



当日は月曆10月15日、つまり十五夜の日。夜には温泉津温泉の真ん中で、先生と共に月を眺めるといった時間もあり、参加者一同大変貴重な研鑽となったことと思います。

全国曹洞宗青年会の活動は皆様の賛助費に支えられております。
この度もご協力いただき誠に有難うございました。

●福井県	62 仙林寺 様	●青森県	26 洞泉寺 様
62 正門寺 様	101 成林寺 様	20 盛雲院 様	49 乗江院 様
69 竜門寺 様	110 竜徳寺 様	39 正法院 様	90 正乗寺 様
145 瑞林寺 様	121 長泉寺 様	99 正法寺 様	96 円通寺 様
	174 龍徳院 様	100 澄月寺 様	122 竜雲寺 様
●石川県	175 天沢寺 様	113 正洞院 様	153 竜泉寺 様
87 海月寺 様	226 常隆寺 様	127 東伝寺 様	167 地藏院 様
	324 松泉寺 様	180 中央院 様	181 黄龍寺 様
●富山県	352 大同寺 様	●山形県第1	244 宝泉寺 様
81 長朔寺 様	374 常德寺 様	246 福城寺 様	246 福城寺 様
83 永久寺 様	461 正法寺 様	11 伝昌寺 様	318 宝田寺 様
	471 大泉寺 様	138 石川寺 様	321 鏡得寺 様
●新潟県第1		151 長谷寺 様	
311 大慈寺 様	●宮城県	224 長泉寺 様	●北海道第1
341 雙善寺 様	29 秀林寺 様	239 東光寺 様	12 善宝寺 様
346 繁慶寺 様	56 大満寺 様		94 曹源寺 様
358 円光寺 様	73 円満寺 様	●山形県第2	484 禅福寺 様
371 長見寺 様	149 喜松院 様	285 泉高院 様	510 禅燈寺 様
389 雲居寺 様	324 光厳寺 様	345 光岳寺 様	
393 曹源寺 様	327 観音寺 様	379 長泉寺 様	●北海道第2
412 甌洞庵 様	392 金秀寺 様	401 長慶寺 様	239 禅昌寺 様
453 龍沢寺 様	446 柳徳寺 様		274 大貫寺 様
496 長楽寺 様		●山形県第3	391 禅昭寺 様
	●岩手県	468 宗伝寺 様	454 大禅寺 様
●新潟県第3	4 長松寺 様	563 洞春院 様	455 玉法寺 様
567 楞嚴寺 様	12 沼福寺 様	502 楞嚴院 様	465 大安寺 様
646 名立寺 様	21 恩流寺 様	504 地藏院 様	
●新潟県第4	25 宝積寺 様	593 玉川寺 様	●北海道第3
112 常安寺 様	44 江岸寺 様	623 歓喜寺 様	141 正法寺 様
137 相円寺 様	52 福蔵寺 様	676 龍泉寺 様	217 法龍寺 様
255 竜皇院 様	111 西泉寺 様	687 寶泉寺 様	227 大泉寺 様
	123 宝城寺 様	738 善応寺 様	
	158 願成寺 様		
●福島県	252 柳玄寺 様	●秋田県	
2 長楽寺 様	269 竜泉寺 様	8 天竜寺 様	
43 東禅寺 様	288 長福寺 様	17 補陀寺 様	

ボランティア基金感謝録

平成 23 年 10/1 ~

平成 24 年 1/5 取扱分

曹洞宗北海道第一宗務所
第一教区青年会 道心会 様
曹洞宗北海道第一宗務所
第七教区青年会 北斗会 様
曹洞宗北海道第二宗務所
第二教区青年部 様
曹洞宗北海道第二宗務所
第四教区青年会 照心会 様
曹洞宗北海道第二宗務所
第五教区青年会 一心会 様
曹洞宗北海道第二宗務所
第六教区空知青年会 様
曹洞宗北海道第三宗務所
第一教区青年会 禅真会 様
曹洞宗北海道第三宗務所
第三教区青年会 道心会 様
札幌禅林青年会 様
青森県 石岡大乘 様
青森県 乗照寺 中村及宏 様
總和会新潟県下越佐渡支部青年部 様
栃木県 慶翁寺 様
千葉県 満蔵寺 檀信徒 高橋信之 様
東京都 青松寺 様
静岡県第四宗務所 照自会 様
静岡県第一宗務所青年会 様
愛知第三曹洞宗青年会 様
三重県第二宗務所青年会 様
三重県 ENEOS 津市上浜町 村上商店 様
京都府 禅福寺 様
愛媛県 興雲寺 様
熊本県 国照寺 様

(順不同)

【お詫びと訂正】

前号で高橋信之様の芳名を間違って掲載いたしました。お詫びと共に再掲載させて頂きました。

曹洞宗僧侶の有志による電話相談窓口です



ひとりぼっちと思わないで...
どんなことでもお電話で
ご相談下さい。

Tel 080-1546-7464
Tel 080-1547-5646
毎週日曜 22:00 ~ 24:00
※相談料は無料(通話料は必要です)

両大本山御用達
梅花流法具販売指定店

法衣・装束・荘厳・神仏具・贈答用記念品

株式会社 梅金商店

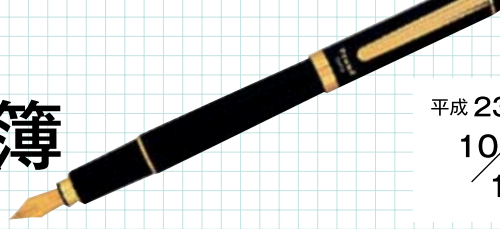
(全国曹洞宗法衣同業会会員)

〈本 社〉〒460-0011 名古屋市中区大須三丁目39番33号
(大須交差点東北側)
TEL(052)241-0901(代表) FAX(052)241-1904

贊助費淨納御芳名簿

平成 23 年 平成 24 年

10/1 ~ 1/5



●東京都

113 長泉寺 様
115 高安寺 様
151 靜勝寺 様
168 養昌寺 様
177 清巖寺 様
252 觀藏院 様
256 妙全院 様
258 東光寺 様
278 高乘寺 様
294 觀栖寺 様
317 竜雲寺 様

●神奈川県第 2

2 西有寺 様
16 正觀寺 様
79 盛徳寺 様
83 正翁寺 様
151 正泉寺 様
383 觀音寺 様

●埼玉県第 1

16 慈眼寺 様
49 昌福寺 様
58 真浄寺 様
64 寿楽院 様
99 常源寺 様
114 東陽寺 様
166 全竜寺 様
200 清岩寺 様
394 香林寺 様

●埼玉県第 2

204 善仲寺 様
206 栄林寺 様
258 能仁寺 様
339 清見寺 様
526 長福寺 様
567 觀音寺 様

●群馬県

20 竹芳寺 様
55 長桂寺 様
217 正泉寺 様
233 明言寺 様
270 乾窓寺 様
276 陽雲寺 様
333 大雲寺 様

●栃木県

68 鶏足寺 様
71 明林寺 様
86 妙蕙寺 様
92 泉溪寺 様
104 洞泉院 様
110 金秀寺 様
114 高林寺 様

●茨城県

113 常晃寺 様
182 竜心寺 様

●千葉県

2 宗胤寺 様
7 満蔵寺 様
89 新福寺 様
95 寶應寺 様
272 永泉寺 様
333 西方寺 様

●山梨県

37 能満寺 様
45 永昌院 様
115 海潮院 様
212 慈観寺 様
245 青原院 様

●静岡県第 1

6 瑞龍寺 様
40 龍津寺 様
45 常安寺 様
50 盤龍寺 様
61 長光寺 様
77 龍泉院 様
83 洞福寺 様
126 一乗寺 様
138 竜興寺 様
162 定輪寺 様
165 光明寺 様
208 延命寺 様
219 慈林寺 様

●静岡県第 2

222 円通寺 様
388 林叟院 様
関谷健彦 様
228 耕月寺 様

229 法華寺 様
273 天桂寺 様
278 慈眼寺 様
325 海蔵寺 様
334 清富寺 様
355 楞沢寺 様
361 広台寺 様

●静岡県第 3

585 成因寺 様
609 医王寺 様
682 長松院 様
791 春林院 様

●静岡県第 4

1025 龍谷寺 様
1065 高林寺 様
1112 大安寺 様
1177 礼雲寺 様

●愛知県第 1

5 功德院 様
94 法正寺 様
182 觀昌寺 様
293 康勝寺 様
313 長松寺 様
612 廣圓寺 様
625 宝積寺 様
628 靈岩寺 様
635 永澤寺 様
638 東昌寺 様
1119 松月寺 様
1039 梅雲寺 様

●愛知県第 2

684 花井寺 様
813 全久院 様
816 松音寺 様
818 楽法寺 様
858 大門寺 様

●愛知県第 3

411 福田寺 様
484 興昌寺 様

●岐阜県

15 東林寺 様
38 最勝寺 様

81 北辰寺 様
116 永泉寺 様
148 円頂寺 様
162 清楽寺 様
219 勝林寺 様
240 林陽寺 様

●三重県第 1

24 一心院 様
37 四天王寺 様
83 涼泉寺 様
298 慶蔵院 様

●三重県第 2

392 大義院 様

●滋賀県

35 慈眼院 様
74 総寧寺 様

●京都府

6 天寧寺 様
73 春現寺 様
80 西光寺 様
161 禅福寺 様
334 海蔵寺 様
389 萬福寺 様
392 運祥寺 様

●大阪府

5 臨南寺 様
12 印山寺 様
26 天徳寺 様
88 正俊寺 様
94 黄梅寺 様
100 南詢寺 様
107 実相院 様
109 法蔵寺 様

●兵庫県第 1

287 向榮寺 様
393 安養寺 様

●兵庫県第 2

145 長源寺 様
173 瑞雲寺 様
188 興禅寺 様
223 龍蔵寺 様

225 大雲寺 様
228 豊楽寺 様
231 光雲寺 様

●岡山県

1 円通寺 様
55 深耕寺 様
131 済渡寺 様

●広島県

17 存光寺 様
46 双照院 様
58 宗光寺 様
106 信光寺 様
133 少林寺 様
152 雲竜寺 様
164 妙楽寺 様

●山口県

25 弘濟寺 様
109 大楽寺 様
174 南湘院 様
196 梅岳寺 様
263 觀音寺 様

●鳥取県

48 談伝寺 様
151 安国寺 様
156 福嚴院 様
159 大祥寺 様
163 雲光寺 様

●島根県第 1

332 興源寺 様

●島根県第 2

49 豊竜寺 様
50 妙岩寺 様
58 洞光寺 様
63 龍覚寺 様
64 安栖院 様
65 宗泉寺 様
80 長寿寺 様
98 法船寺 様
187 養善寺 様
195 總光寺 様

●愛媛県

81 宗楽寺 様
113 西禅寺 様
146 興雲寺 様

●福岡県

158 報恩寺 様

●大分県

134 長安寺 様

●長崎県第 1

13 天福寺 様
51 祥雲寺 様
75 瑞雲寺 様
78 宝泉寺 様

●佐賀県

108 光明寺 様

●熊本県第 1

27 東禅寺 様
59 円通寺 様

●熊本県第 2

88 明德寺 様

●宮崎県

2 吉祥寺 様
38 觀音寺 様

●長野県第 1

102 真竜寺 様
121 浄光庵 様
130 福泉寺 様
147 徳応院 様
158 満泉寺 様
227 岩松院 様
338 長谷寺 様
346 向陽院 様

●長野県第 2

419 宗徳寺 様
474 長桂寺 様
565 阿弥陀寺 様
508 眞浄寺 様
御子柴志道 様

聞く禅

広報委員会委託委員 青野貴芳

第三回 坐禅とメタ認知

今回は、いよいよ坐禅について触れることとなります。しかし、私ごとが坐禅について語るとは、恐怖と慚愧で顔が引きつりそうです。キーボードを一文叩いた途端、三世十方より払拳棒喝が飛んできそうです。本編のタイトルからしても当然避けて通れない話題だと分かっていたはずですが、この企画を引き受けたときの私はいったいどんな心持ちだったのでしょうか……。ともかく、蛮勇を奮って書き進めていきます。

坐禅について書くと言いましたが、本稿に関係するのは坐禅の技術的な部分のみになります。即ち、坐禅の一部について述べるのみであって、その全体像を云々するわけではないと予めご承知置きください。

1 坐禅とマインドフルネス

さて、前回、認知行動療法の治病メカニズムには、思考から距離をとれること（脱中心化）、すなわちメタ認知の使用（特にモニタリング機能）が大きな役割を果たしているという見解があると書きました。

この見解を発表したティーズデイルらは、患者のメタ認知使用を助長する技法を求め、マサチューセッツ大学医療センターのジョン・カバットジンを訪ねました。カバットジンは、「マインドフルネス・ストレス低減プログラム」の開発者です。

「マインドフルネス」という術語が出

てきましたが、カバットジンによると、「意図的に、今この瞬間に、価値判断をすることなく注意を向けること」と定義されます。もともと、この語は、仏教語の「念」の英訳ですが、最初にこのように訳したのは、ベトナム人禅僧 テイク・ナット・ハン師であったと聞いています。

カバットジンによる定義は、実践的な意味では十分だと思いますが、本来の「念」の意味と正確に一致しているわけではないように思います。しかし、「マインドフルネス瞑想」といえば仏教系瞑想を意味し、「マインドフルネス」は、その中核的技法だという理解が定着しているようです。マインドフルネス瞑想を利用した心理療法は、現在、様々なものがあるようですが、カバットジンのプログラムは、その嚆矢（こうし）です。

マインドフルネスはメタ認知を使用・強化するものであり、ティーズデイルらが求めているものでした。その後、この技法が認知行動療法に取り入れられることにより、マインドフルネス認知療法が開発されることになりました。

上記のカバットジンによる定義からすると、マインドフルネスは坐禅においても機能していると考えて差し支えないと思います。すなわち、坐禅においても、メタ認知機能が重要な役割を担っていると言えるでしょう。また、カバットジンは著書の日本語版への巻頭挨拶で、道元禅師、鈴木大拙氏、鈴木俊隆師から影響を受けたと書いていますが、それも一つの傍証となるので

はないでしょうか。

2 経典から見た坐禅の技法

次に、経典には坐禅の技法についてのどのように書いてあるのか見てみたいと思います。

以下は『大念処経』の一節ですが、「……涅槃の実現のため、このただ一つの道がある。つまり、それは四念処である。

四種とは何か。修行僧たちよ、ここに、修行僧は、身体について身体を観察しつつ、熱心に、正しく知り、よく気をつけて、この世における貪欲や憂いを除去していなさい。

感受について感受を観察しつつ、熱心に、正しく知り、よく気をつけて、この世における貪欲や憂いを除去していなさい。

心について心を観察しつつ、熱心に、正しく知り、よく気をつけて、この世における貪欲や憂いを除去していなさい。

法について法を観察しつつ、熱心に、正しく知り、よく気をつけて、この世における貪欲や憂いを除去していなさい」と述べられています。

ここに述べられている四念処は、身・受・心・法の四つを観察する方法ですが、坐禅と異なるものではないと私は考えます（何しろ、お釈迦様が教示されている方法なものですから）。この四つの観察対象を、「熱心に、正しく知り、よく

気をつけて観察する」ことが坐禅で行う作業ということになります。このうち、「よく気をつけて」という箇所は、原文を見ると「念を持つて」と訳せませんが、この「念」が坐禅に特徴的な認知操作ということになるでしょう。

また、この坐禅の定義からすると、坐禅を坐法に限定する必要はなく、どんな姿勢でも四六時中実行することができます。否、修行者であれば、そうすることが求められます。先回例として挙げた飯台作法なども、その認知技術からして坐禅そのものであると言えます。

ちなみに、坐禅の主要素として「三昧（集中状態）」も挙げられると思いますが、三昧は、「熱心に、正しく知り、よく気をつけて観察」した結果、達成される状態だと思います。

3 「念」について

念という語は、近年、「気づき」と訳されることが多いように思いますが、本来、「想起」や「記憶」を意味します。一見すると関係ないように思えますが、「気づき」と「想起」「記憶」は何の関係があるのでしょうか。

仏教には様々なイメージ瞑想も伝わっていますが、上記の四念処だけでなく、イメージ瞑想にも念は機能しています。イメージ瞑想の場合、念といえば、まさにイメージを想起しつづけることになるので、念という語と「想起」「記憶」という意味のつながりは理解し

やすいと思います（一方、イメージ瞑想の場合、念と「気づき」という意味はつながりにくいのではないかと思います）。

坐禅では、今この瞬間に起きたことを自覚している（気づいている）わけですが、これは、認知内容をすぐに確認する作業だと言えます。すぐに確認するといつても、それは認知した時点より必ず後で行われる作業であり、どれほど時間的に近接していても同時ではありません。すなわち、確認とは、記憶として保持された認知内容を想起することだと言えます。そのような次第で、今この瞬間に起きたことの自覚（気づき）は、想起の作用であることになるので、「念」と「想起」「記憶」が繋がることになりました。

念の実例を挙げると、たとえば、補助手段としてしばしば用いられる随息観では、息を吸ったとき「吸っている」と頭の中で言葉にしてみるなどが念になります。念には言葉を使うものも使わないものもありますが、宗門で行われる行持の中では、読経や偈文を唱えることなどは、言葉を使った念だと言えるでしょう。

一方、宗門の坐禅では、一般的に言葉は使われないように思います。この場合、言葉を使わない念が働いていることになり得ます。宗門では、坐禅の心術として「妄想を流す」ということがよく言われるようです。これは、「妄想をはっきり自覚しつつ、それに囚われない」ということだと思えます。坐禅

中は神経が鋭敏になっているので、当然、認知内容（この場合は妄想が認知内容）をはっきり自覚していることになり得ます。また、はっきり自覚しているからこそ、妄想に囚われずにいられます（無自覚に妄想を垂れ流すと、妄想の渦に巻き込まれることになりました）。この自覚状態が、念ということです。

『清浄道論』では、「妄想からの防護が、念の主たる作用として挙げられており（念じ続けることにより、妄想が出現する余地をなくすということでしょう）、ティーズデルらが言う「思考から距離をとれること」が指摘されているわけではありません。しかし、思考から距離をとることにより、妄想の自動的な展開が阻止されることにもなるので（二の矢、三の矢を放たない」ということです）、両者は関係していることになります。

4 おわりに

坐禅における念は、実際の作業の点から見ても、今ここでの認知内容をモニタリングし続けることだと言い換えて問題ないでしょうから、メタ認知技術であることは明らかです。

私どもの修行は、メタ認知を行動させ続けることだと言うこともできるのではないのでしょうか。



青野貴芳（あおの きほう）
1970年静岡県生まれ。東京大学大学院満期退学。大本山永平寺、宝慶寺にて安居。現在、養雲寺副住職、中里保育園園長、愛知学院大学・富士市立看護専門学校非常勤講師、全曹青広報委員会委託委員。

坐禅における念は 今ここでの認知内容を モニタリングし続けること

03 Air Mail 海外ZEN通信

ヨーロッパ国際布教総監部庶務担当／釜田尚紀



弟子丸泰仙師像（フランス・龍門寺）

De mon âme à ton âme(以心伝心)

ボングジュール！僕にとって2度目の冬がやってきました。お日様の昇っている時間は極端に短くなり、朝夕の通勤時間帯は真っ暗。寒さも日に日に厳しくなって、あの熱線のような夏の日差しがすでに恋しくなっている今日この頃であります。

さて前回に引き続き、ヨーロッパにおける曹洞禅の始まりを紹介したい。すでにお話ししたように、ヨーロッパに曹洞宗の禅を伝えたのは弟子丸泰仙師（1914～1982）である。もともと在家の居士として澤木興道老師に長く参禅し、老師が亡くなる間際に得度を受けた。出家後さまざまなお寺で参禅指導をし、ある日、ヨーロッパからの参禅グループの指導を引き受けた。その縁がフランスで禅を教えてほしいという要請につながり、1967年、渡欧を果たす。

初めは食料品店の空き倉庫を道場に、一人で坐禅を組むところからスタートしたという。師はフランス語が喋れず、英語も片言、最初に講演を依頼された時は体当たりで禅を伝えようと、テーブルの上に結跏趺坐をして坐禅の姿を見せたそうだ。ヨーロッパ人にとって異形な黒衣姿、岩のような厳しい顔、大きなジェスチャーとドスのきいた声、豊かな特徴を持つ弟子丸師はずいぶん注目を集めたようで、すぐに一緒に坐禅を組む若者たちが現われ、講演の依頼も増えていった。

当時の弟子丸師には決めゼリフがあったという。それが「De mon âme à ton âme（ドゥモナムー アトナムー）」（私の心から君の心へ）、すなわち「以心伝心」。禅とは何か、言葉の壁を超えて伝えようとした弟子丸師に、確かにぴったりくるゼリフだ。みるみる有名になり、熱心な信者や協力者を獲得した師は2年後「ヨーロッパ禅協会」を設立。10年後、その関連道場は60を超え、会員数は約16万名となっていた。まさに一大ブーム、曹洞禅はヨーロッパに大きな風を巻き起こした。

弟子丸師はその著書『禅僧ひとりヨーロッパに行く』（春

秋社1971年）で、このブームの理由を次のように分析する。

「ヨーロッパ人は物質文明の行き過ぎを知り、彼らの伝統的な宗教は組織的、儀式的、排他的で感化力に乏しく宗教の本質を失ってきていることに気づいてきた。精神的飢渴は西洋文化固有の宗教資源では癒されず、東西両文明の調和による新たな文明の構築が求められた」。（以上要約）

また20世紀になってD.T.鈴木が世界に禅を紹介し、西洋哲学者やキリスト教聖職者の中にも禅に関心を示すものが増えた。このように禅が西洋社会に徐々に認知されてきたところに、坐禅という行を実際に見せた弟子丸師が現れた。人々はちょうど欲しかったものを得る形になったのかもしれない。

しかし、やっぱり想像できない。僕は今、弟子丸師がいたパリに在るわけだけど、カリスマと行動力、素晴らしい教え、それさえあれば、この異国でこんなに多くの信者を獲得することができるのか？ 禅にはそれほど急速に人々を熱狂させる力があるのか……？

この頃ヨーロッパが一体どんな様子だったのか調べてみると、弟子丸師が渡欧した翌年の1968年、パリでは「五月革命」が起きている。そして「プラハの春」、学生運動、ベトナム反戦運動……。ビートルズがマハリシの元で瞑想修行するためインドに滞在していたのも1968年だ。初めてウッドストックが開催されたのは1969年。なるほど、なんとなく分かってきた。禅が熱かったのではない、世界全体が愛と自由と平和を求めて振動し加熱していた時期なのだ。

「以心伝心」とは本来、不立文字の仏法が師から弟子へと伝わっていく様子を表現したもの。当然その境涯に至るには、師弟間の長き修行が必要となる。熱狂の時代、はたしてその真意をつかんでいた修行者がどれほどいたのかは分からない。しかしこの言葉とともに曹洞禅の種は、ヨーロッパの広大な大地に一気にばらまかれた。

青年僧がいく!

全 曹青会員の等身大の姿に迫る本コーナー。記念すべき第1回目に迫る西古孝志師は、平成12年に大本山永平寺に安居し、典座寮や監院寮を経験。その後、曹洞宗総合研究センター教化研修部門研修部で研鑽を積んだ後、師寮寺に戻って布教教化活動に励んでいる。その西古師が一貫して関心を持ってきたのが「食」だ。教化研修部門在籍時には、曹洞宗総合研究センター学術大会において「宗教行事と家族の食」にみる家族再生の可能性」と題した発表を行った。そんな師が「食」に関心を持つきっかけとなったのは、料理家・辰巳芳子さんの言葉との出逢いだったという。



今回の訪ね人
 いずも曹洞宗青年会 全国曹洞宗青年会 広報委員 養善寺副住職 西古孝志師こうし

「食というものは呼吸と等しく、生命の仕組みに組み込まれている」

西古師はこの辰巳芳子さんの言葉の意味を深く知りたいと感じ、その著書や講演に触れ、茶道に親しみ、食育インストラクターの資格を取得。地元・島根県出雲地方の「食」についての調査も行ってこれられ、4・5年前から『食縁』という言葉を使い始めた。

『食縁』とは、食育につながる・縁とつながるものをさらに強化した言葉です。以前、「食事のどんなところが好き？」と尋ねられました。私は、「いただく雰囲気・共にいただく人と、美味しく・楽しく・気持ちよくあること」と答えたのです。食を通じたつながりを特に大切にしたいという思いで『食縁』を使っていますのびす。

では、『食縁』とは、具体的にどのようなことを意味するのかわかるか？

食事という営みは「いのちをいただく」「こころをいただく」「私」と「いのち」と

のつながりを力強くするためにも『食縁』を強化することが重要だと考えています。家族・友人・生産者といった人々とのつながり。旬・風土といった自然とのつながり。供物・直会（なわらい）といった先祖や神仏とのつながり。また食事作法といったものが、そういった「いのち」も、そして「自分自身」をも活かすもの信じています。

西古師によれば、この『食縁』を具体的に伝えていくカギは、日本古来の「行事食」にあるという。

昔から、正月や法事、披露宴など様々な行事・儀式には必ず食事がついてきたものです。しかしこの「行事食」は、意識して伝えないと、世の中の合理化の流れの中で廃れてしまうもの。「人と人・地域・人と自然」、「人と聖なるもの」といってつながりをなくさないためにも、「食事」と「行事」を大切にすることを通じて、『食縁』を伝えていければと思います。そのことにより、人々・地域のつながりがより太くなればと

思っています。現在は、私自身が「行事食」を実践し、また、寺報や法話の機会を通じて『食縁の大切さ』をお伝えしています。

師は今後、様々な形で「食」と関わっている人々との出逢いを大切にしていきたいと考えているとのこと。

「食」に携わっている方、「食」に関心をお持ちの方は多くいらっしゃいます。とりわけ、食物以外の、例えば器やお箸などを生産している方々にお逢いしてみたいものです。『食縁』を通して、いかに平易に、そして宗意にかなった伝え方ができるかを、日々探りながら精進してまいります。

『つながりの希薄化』が危惧されている現代。『食縁』は、そのつながりを意識する絶好のテーマだと感じた。『典座教訓』『精進料理』といった、大きな資産を預かる私たち曹洞宗宗侶にとっても、関心を持つべき分野ではないか。

取材／広報委員会副委員長 長岡俊成

『食縁』ガイド 西古師のお薦め本



『食の位置づけ』そのはじめ〜』
 (著)辰巳芳子、東京書籍
 辰巳さんの「食」に対する思いが、経験や対談を通し、わかりやすく述べてある好著。



『切抜き速報 食と生活版』
 (二ホンミックス)
 全国紙・地方紙、各種新聞で「食」についての記事をまとめた月刊誌。料理の知識・食の安全・食生活など、様々な「食」の情報を得る上で最適で、特に各地域の食文化がわかり、役立つ。

各管区加盟団体紹介 「東北管区」

●東北管区

東北6県8宗務所総寺院数2515ヶ寺からなる管区であり、毎年各県持回りで東北地区青年会地方集会を開催しております。昭和51年の第1回岩手大会から36回を数え、各県の試行錯誤の企画運営により研鑽と親睦を目的として行われて参りました。

特に今年度は東日本大震災発生の年であり、青森大会におきまして148名が一堂に会し、発生の事、瓦礫撤去等ボランティア活動の事、避難されている方々との触れ合いなど、復興に向けて今後こうして行こう、ああして行きたいなど、肩を叩き合いながらの光景に感動し、『東北はひとつ』を実感させて頂きました。青年宗侶として同じ時間を共有し、同じ目標に向かって、今だからこそ出来ることは何かを共に考えていく大会となりました。

東北管区理事 稲田泰久

●秋田県曹洞宗青年会

秋田県曹洞宗青年会は、昭和53年の発足より今年で33年の歴史を積み重ね、会員も45歳未満の青年宗侶で136名を数えます。執行部は2年を任期とし、県央、県南、県北の順に会長を選出しております。

年間の恒例行事は、『弁道会』『随聞会』『住職学研修』なる講師をお招きしての研修会で、近年では時の会長が2年間のテーマを掲げ、そのテーマの下に研修会を開催しております。

今期のテーマは、「現代僧侶く今、求め

られる姿」と題しました。このテーマを思いついた時、まさかあの様な大震災が起ころうとは思いませんでした。しかし、隣県の青年会として復興へのお手伝いを続ける中で、これもまた求められる姿と、このテーマとの巡り合わせを感じた次第であります。

月に1、2回の被災地に赴いての微力な活動ではありますが、今後もニーズに応じた企画を行茶活動と並行しながら展開してまいりたいと思っております。

また、会員諸兄の団結と個々の布教活動の指南となる研修会も開催してまいりたいと考えております。活動についての詳細はホームページからもご覧いただけます。

秋田県曹洞宗青年会会長 久米弘道

●曹洞宗福島県青年会

曹洞宗福島県青年会は、昭和39年に発足し、現在108人の会員が在籍しております。県内を県北、県中、県南、相双、いわき、会津の6支部に分け、緑陰禅のついで、冬の托鉢などは支部単位での活動しております。また、毎年支部ごとに特色ある自由研修会が開催され、県内会員の研鑽と親睦を深めております。

今年度は東日本大震災の為、例年の活動に加え、支部ごとの行茶ボランティア活動、県全体での炊き出し、慰霊法要などの活動も行って参りました。その際全国の曹洞宗の皆様にもお手伝いを頂きました。これからも微力ながら、福島県の復興のお手伝いを続けていきたいと思っております。

曹洞宗福島県青年会会長 高森正純

●宮城県曹洞宗青年会

当会は昭和44年に発足し、初代全曹青年会の門脇允元老師（故人）を輩出した歴史ある会です。会員は正会員（45歳未満の宗侶）175名、賛助会員（おもに青年会OB）130名、特別会員（おもに県内の企業）74社で構成されています。宮城県は1つの宗務所で21の教区があり、各教区から代表の理事を選出し、役員会から上程された議案を理事会において協議し全ての事業を行っております。

昨年3月11日の東日本大震災以降、全曹青様、各曹青会様、全国の御寺院様、関係の団体様から大変多くの温かいご支援・ご協力をいただきました事、深く感謝申し上げます。例年であれば年2回の研修会、ボランティア研修会、宗務所共催のソフトボール大会（毎年300名以上の参加）、チャリティバザーの開催、年2回の会報誌の発行、また当会が主幹するサンタビジュアルみやぎボランティア会の活動としてカンボジアに小学校建設を柱とする教育支援を行っております。

しかしながら本年は「少水よく石を穿つ」をスローガンに掲げ年度の事業全てを復興支援に傾注し、県内各地域での瓦礫の撤去や泥出し、避難所での炊き出し、復興支援バザー等を行い、毎月11日に津波被災地域を廻って月命日法要を修行しております。復興まで長い道ではありますが、僅かな力でも一滴一滴を注ぎ続けてまいります。今後とも皆様のご協力ご支援を宜しくお願い申し上げます。

宮城県曹洞宗青年会会長 奥野秀典

災害復興



支援現地本部

ホームページ『般若』の右上に、『復興支援部だより』というバナーがあることを、皆さんはご存じですか？このバナーをクリックすると、福島県伊達市の成林寺内にある「災害復興支援現地本部」が運営するブログを見ることができます。行茶ボランティアなどの様々な活動が、等身大のことばで、かつリアルタイムに綴られています。

そのブログの執筆者としてよく登場するのが、「さみー」こと、大河内瞳さん。大河内さんは、原発被害にあっている子どもたちを対象行われたサマーキャンプに看護スタッフとして参加した縁で、9月から本部にてスタッフを務めています。温かみのあるイラストや絵文字で、ブログや行茶活動を盛り上げている他、常日頃、事務手続きやボランティアのマッチング作業、ワークショップの運営などで災害復興支援現地本部を支えてくださっています。

そんな大河内さんに活動の課題をお伺いしたところ、「現在軌道に乗っている、アクリルたわし作りワークショップなどの活動を、いつまで、どのような形で継続していくべきか、どこで地元の方々にお渡しすればいいか、その見通しが立っていないことですかね」とのこと。災害復興支援現地本部の活動の中心地のひとつである福島県は、原発被害の収束の見通しが立っておらず、他県での活動と比較しても、とりわけ展望が描きにくいようです。

全曹青会員にメッセージをお願いしたところ、「集会所では、お坊さんのお話をお聞きしたいというニーズが出てきていますし、また、レクリエーションなどを通して、楽しい時間を過ごしたい方もおられます。ギターが弾けたり、特に、男性の方々と囲碁や将棋ができたり…。そんな特技をお持ちの方など、ぜひ積極的に参加していただければうれしいです」とのこと。

災害復興支援現地本部では、会員の皆さんのより一層のご参加をお待ちしております。活動情報については、ホームページ『般若』、『SOUSEI』、そして『ブログ・復興支援部だより』をご覧ください。



災害復興支援現地本部の活動を支える大河内瞳さんと手書き看板

●青森県曹洞宗青年会

青森県曹洞宗青年会は、昭和52年に発足して以来、8つの教区総勢78名の会員で構成されています。平成23年度は東北管区(6県)の輪番制にて東北大会を開催県として迎えました。6年に一度の集会です。準備を進めていた矢先に東日本大震災発生、以来開催を見合わせた時期もありましたが、『追悼』と『復興支援』をテーマに開催しました。

僧侶でも炊き出しは出来ず。更には僧侶でなければ出来ない役割が慰霊・追悼でありましょう。参加者全員行道での施食会を厳修し、以て諸精霊に向向出来たのも、東北青年僧一丸となった威神力を感じました。今後も、集って語り合う会員相互の親

睦に努めたいと考えております。

青森県曹洞宗青年会会長 白澤雪俊

●岩手県曹洞宗青年会

当会では、年間に2回の教養セミナー、一般を対象にした緑陰禅の集い、歳末助け合い寒風托鉢、教区持ち回りでの懇親会、そして2年間の役員任期の終わりには旅行も計画されます。しかし、3月11日の東日本大震災で多くの方が被災され今年度は歳末助け合い寒風托鉢を除く、全ての行事を被災地復興支援として行う事にしました。

これまで、当会に支援活動のお力添えを頂きました団体・個人の皆さまに深く感謝を申し上げます。我々微力ではありますが支援活動を続けて参りますので、これから

も宜しくお願い申し上げます。

岩手県曹洞宗青年会会長 新沼孝純

●山形県曹洞宗青年会

当会は昭和43年11月に発足し、山形第一宗務所管内から90名前後の会員宗師により構成されております。地域ごと4つの支部があり、支部単位で例会や緑陰禅の集いなどの活動を行っております。

研修会、親睦事業などの活動を通して親睦を深め、会員相互の向上と絆を深めています。

又、地域に残されている『萬燈供養』の保存伝承も活動の一つです。同地域では、授戒会、晋山式、結制式、火屋を使つての本葬など法要も盛んで、法式研修等は実践

も踏まえ盛んに行われております。

さらに行動力がある事が伝統としてあり「大衆教化の接点」を伝統のテーマとし、その時代にあつた活動を原則としていきます。過去には、姫神コンサートと萬燈供養をコラボした『音楽と萬燈供養のしらべ』東京の劇団と台本から舞台まで作り上げた『演劇道元』二胡演奏と坐禅を合わせ、癒しをテーマとした『ひといき禅』など形式にとらわれないアイデアで、何も無いところから形を作り、大衆に向けて教化活動を行ってきました。平成24年度は山形にて曹洞宗青年会東北地方集會が行われます。より一層の団結と責任をもって活動の充実に努めてまいります。

山形県曹洞宗青年会会長 二ノ戸亮昌



総合企画委員会

■安達瑞樹委員長



私たちは総合企画委員会には、パソコンの得意な人から、多言語の話せる人、人脈の広い人や文才のある人まで様々です。ただ、共通していることといえば、とにかく「一歩前へ」の精鋭揃いです。19期スローガン「今が明日への新たな一歩」を胸に、各委員会や災害復興支援部と協同し、想いや願いを形にする活動を、委員一丸となって引き続き邁進して参ります。

■細川伸道委員



前期に引き続き、総合企画委員を務めさせていただきます。御縁のあった前委員長さまが、第19期の会長職に就かれております。松岡会長が掲げたスローガン「今が明日への新たな一歩」を胸に、選り好みせず様々

な活動に取り組んで参りたいと思います。総合企画委員会の担当案件は幅広いがあります。しかしながら、同期の委員諸師と共に一生懸命知恵を絞って、新たな一歩を創り出して行けたら...と思っております。

■瀧澤勝俊委員



今期で3期目となります。初めての委員会活動という事で最初は不安でしたが、今ではやっとなりに慣れてきた所です。主に頒布物の統括・発送依頼を担当しており、発送先に間違い等が無いか確認したり、発送業者さんとの連絡調整等を行っております。まだまだ不慣れで他の委員さんに頼る所も大きいのですが、円滑に頒布事業が進んでいくように努めてまいりたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

■永島昌英委員



新潟県曹洞宗青年会の永島と申します。前期に引き続き総合企画委員会で仕事をさせていただきます。委員会の仲間と多くのアイデアを出し合い、素晴らしい企画、頒布物をご提供できますように頑張っております。どうぞ宜しくお願いいたします。

■原知昭委員



いずも曹洞宗青年会の原知昭です。前期より総合企画委員会に所属させていただいております。主に頒布事業を担当しております。頒布事業は全曹青の運営において重要であると同時に、全国の御寺院様ともつながりを感じる事ができる、やりがいのある事業です。今後も全国曹洞宗青年会の活動に尽力してまいりますので、よろしくお願致します。

■神作紹道委員



全国の方々に全曹青の頒布物を周知頂けるように「OSUSEN」折込みのチラシ作成や編集を主に担当しています。とは言え、委員会の皆さんのご協力のお陰で成り立っております。苦労して作り上げた頒布物をどのようで紹介すればベストなのか、いつも頭を悩ませますがそれがまた楽しくもあります。今後も皆様の活動を支援できるよう取り組んでいきたいと思っております。

■宮本隆弘委員



前期より引き続き第19期も総合企画委員をさせていただきます。今、主に

「OSUSENオンラインショップ」の頒布物注文受付を担当しています。今期では、前期よりの企画途中だったものや、新規の企画発案をしていきたいです。特に御寺院皆様に好評をいただいております。写経用紙、写経セットの色々な種類を増やしていきたいと思っております。また、総合企画委員会の委員皆で力を合わせ第19期も頑張っていきたいと思っておりますのでよろしくお願いたします。

■岡島典文委員



愛知県第一曹洞宗青年会の岡島です。総合企画委員を委嘱される商品の頒布や「花まつりキャンペーン」などを主に担当しております。全曹青への参加は今期が初めてとなります。諸禅兄のご指導をいただきながら、自らの思いやアイデアを委員会に反映できたらと思っております。1期2年という限られた時間を有意義な時間にできるよう精進してまいります。よろしくお願致します。

■松林宏明委員



この度、京都曹洞宗青年会より総合企画委員に出させて頂いております松林宏明です。主に総合企画において昨年

の基幹事業でありました「観世ふおん」の継続に伴う仲介と、震災以降に始まりました「虹のかけはし文通プロジェクト」の担当をさせて頂いております。どちらもおの心に関係する事業であり、「観世ふおん」については私自身も相談委員をさせて頂く中で重要性を感じております。また、虹のかけはしについても実際に現地のニーズと手紙の回収率が伴っておらず、実際に返事がきた方もおられず、早急な対策の必要性を感じます。皆様のご協力をお願い申し上げます。

■児島龍憲委員



この19期より総合企画委員会に微力ながら参加させていただくことになりました。前北海道管区理事さんに推薦されての全曹青出向、初めての事ばかりで戸惑うことや北海道の曹青会から選ばれたという責任の重さをとても感じております。いただいた任に対して、精一杯全うするのが今の自分にできる最低限の務めだと思っております。委員会では主に頒布物の受付、写経用紙の担当です。これからも頒布物や企画を通して、仏縁が全国に広がっていくといいなと願っております。



「利行」 撮影／倉島隆行（広報委員長）

除染作業の時に見付けた柿。私たちの作業を静かに見守っている柿は、毎年同じように色付いているのでしょうか。……タダマケズニ
【撮影地 / 福島県伊達市霊山町】

【写真の募集要項】全曹青広報委員会では、皆様からの写真作品を募集しております。詳しくは下記のメールアドレスまでお問い合わせください。
photo@sousei.gr.jp 次回テーマは「同事」です。

■表紙の話 「星々の共鳴」

方角を見失った時は目標が必要になる。空に輝く北極星のような。うっすらと開けて来る夜空、確実に昇って来る太陽、雄大な星空。大自然の中で生きている、人間の儚さを思い知らされます。その中を命を燃やして一歩ずつ進んでいく私達。曹洞宗という心の北極星を中心に、小さな星々がつながりあって共鳴する。そんなイメージを思い描き、今号の表紙としました。

撮影／日山賢吾 デザイン／広瀬知哲



編集後記

全曹青に参加して早5年。とても沢山の方々に出会いました。出会ったと言っても、ネットワーク上が主な場です。私は、全曹青に送られてきた悩みを抱えた方のメールに、返信を書いています。とは言え、他の委員の方々に必ず確認して頂きますが、時には重い話をされる方もいらっしゃいます。観音様はいいなと思います。苦しみそのものを取り除けるのですから。しかし、私は人間で、それほど考えても相談者の「苦」の肩代わりはできません。せいぜい、相談者が話の内容を整理する程度のことしかできません。でも、それで安心される方は沢山いらっしゃいました。

私はいつしか「苦」は相談者個人の財産だと考えるようになりました。悩んだ分、賢くそして周りに優しく出来るはずですよ。

悩みを抱えた方々、どうぞ周りの方々に相談してください。家族、同僚、近所の方……。それでも解決しなければ全曹青に聞いてください。私達は、いつでもお話を聞く用意ができています。

（広報委員 岡本真幸）

守り伝えられし大切な伽藍、
私どもの技と経験がお役に立てれば幸いです。

社寺建築のカナメ

新築・改修・屋根工事・耐震



http://www.caname-jisha.jp

■ 本社 栃木県宇都宮市平出工業団地38-52 電話：028-663-6300
■ 名古屋支店 愛知県一宮市森本4-15-23 電話：0586-71-2882
■ 岡山営業所 岡山県岡山市北区今8丁目13-13 電話：086-245-2541

平成23年度 禅文化学林

「巡る、悼み〜今が明日への新たな一歩〜」のご案内

全国曹洞宗青年会(以下、全曹青)は、平成23年3月11日に発生した東日本大震災から1年という節目に当たって、この度の未曾有の経験を、被災地の内外を問わず「同事」と「正見」の行実として共有していくために、全会的な祈りの機会を創出し、これからのボランティア活動や被災地の関心をつなぎ止め、今後さらに拡充させるべく、左記の通りの内容を企画致しました。

【日時】平成24年3月1日(木)から18日(日)までの期間開催とします。

【メインテーマ】

「巡る、悼み〜今が明日への新たな一歩〜」

東日本大震災の悼みが、発生から1年を経過しても巡り渡って、時間空間を超えて共有されることを祈念して命名しました。時間とは即ち、今後この悼みの継続され道環することが源泉となり、被災地の復興とその取り組みが、今後も中長期的に継続されること、空間とは、被災地の内外を問わず、この悼みが共有されることです。

【内容】

- 1 期間中に厳修される、加盟・関連団体による慰霊・復興祈願法要の予定をHP『般若』にて告知します。
 - 2 慰霊・復興祈願法要を左記の通りに厳修します。
主催/全日本仏教青年会、主管/全国曹洞宗青年会
日時/平成24年3月11日(日) 13時開場
14時30分打ち出し・14時46分黙祷
散堂後、解散(差定は予定です)
- 場所/福島県伊達市・成林寺本堂
〒960-0806 福島県伊達市霊山町山戸田中ノ内20
(全曹青災害復興支援現地本部)

3 被災地での慰霊・復興祈願法要にご参列される団体に、これを機会として、改めて被災地でのボランティア活動をして頂くコーディネートを行います。

4 期間中には、全国各所でパネル展「巡る、悼み〜大震災に縁り添う僧侶たち〜」を開催します。※開催場所・日時に関しては、同封のチラシをご参照下さい。

5 18日(日)には、災害復興支援現地本部を設置する福島県伊達市霊山町の住民のみなさんを招待し慰励するイベント「成林寺祭り」(仮称)を開催します。※関連する最新の情報、全曹青ホームページ『般若』をご覧ください。

慰霊法要とボランティア活動は、全曹青への加盟非加盟を問いません。これを機会に、『SOUSEI』の読者の皆様にも、期間中の被災地入りを一考賜りたく、ご案内申し上げます。尚、1の場合にはそれぞれの開催団体へ、2,3につきましては、全曹青の担当事務局までお申し込み下さい。

【お申し込み】

全曹青ホームページ『般若』<http://www.sousei.gr.jp/>の専用フォームからお申し込み下さい。

【お問い合わせ先】

平成23年度禅文化学林事務局総合企画委員・原知昭
〒692-0055 島根県安来市飯生町485 宗見寺内
電話 090-4148-9417
ファックス 0854-22-5440
メール mrmoonlight@chorusocne.jp
【お申し込み切】
平成24年2月20日(月)必着
メール mrmoonlight@chorusocne.jp

「東日本大震災被災地復興再生支援」

東北地方太平洋沖大津波で被災した岩手県陸前高田市。
高田松原の七万本とも言われる流木松を再生利用して制作しました。名松たちといつも一緒に、亡くなられた方々のご冥福と被災地の復興を願い、高田松原の松林の再生を見守ってください。



※写真提供:陸前高田市 海岸山 普門寺様



百八玉念珠正絹紐房(桐箱入)
尺六 12,500円 尺二 10,000円



男・女性用単念珠(桐箱入)
正絹房(色は各種ございます) 4,800円



念珠プレス(大、小ともに) 2,800円

ロゴは、松とRの文字を重ね、津波の猛威にも負けずに立ち続ける一本松が力強くガッツポーズしている姿をイメージしました。

放射線等測定検査を(財)新日本検定協会に依頼し、放射線、放射線量及び放射線面密度ともに不検出の証明を受けております。

「陸前高田の松原の再生を支援する会」

東日本事務局/創文社印刷(株)内 〒420-0812 静岡市葵区古庄二丁目7-16
お問い合わせ/090-3382-0972(海野まで)
ご注文/FAX専用054-265-2180又は
E-mail/f.yasumoto@soubunsysa.co.jpまで
ご寺院名、送付先住所、ご注文の内容を明記の上ご送付ください。
10~15日後に到着するようお送りいたします。
お支払いは代金引換でお願いいたします。(全曹青会様の送料・手数料に準じます。)

※収益金(諸経費を除く)を被災地の復興と高田松原の松植林事業の基金に充当させていただきます。